

令和4年度 学校評価表

学校教育目標	「心豊かで自ら求めて学び生き生きと活動する生徒の育成」	
--------	-----------------------------	--

a ミッション	組織的な学校経営を生かした小中連携教育による主体性・表現力の育成	a ビジョン 生徒が「因北中で学んでよかった」、保護者が「通わせてよかった」、地域の方々「地域の宝である」と思える学校	尾道市立 因北中学校
---------	----------------------------------	--	---------------

評価計画				自己評価						学校関係者評価		改善計画	
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価		l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値				イ	ロ		
授業改善による確かな学力の定着	自己肯定感を高めるための互恵的な授業づくりを通して、学びを深める。	1 主体的・対話的で深い学び 学習課題の解決に向けて、疑問を表明したり相互に説明し合う場面をつくり、「協働的な学び」を深める。	「授業では、友だちと話し合うなどして、自分の考えを深めたり広めたりしている」生徒の割合	80%以上	81.7%	86.2%	108%	A	・話し合いの型を示すことで、話し方、問い返しの仕方、意見のまとめ方が明確となり、「話し合いをして自分の考えを深めたり広めたりしている」と感じることができている生徒は増加している。 ・タブレット端末を活用した授業を意識して、授業を行うことができている。	○		・前回よりも達成度が上がっていることは成果だといえる。 ・「考えを深める」「わかる」と意識する生徒が増えていることは大きな成果だと思ふ。 ・(授業等を見ると)ICTの活用が十分できていると感じた。生徒が興味を持って授業ができていく。 ・タブレット端末の活用の工夫を評価に入れても良いのではないか。 ・生徒には、得意・不得意があるので、「授業がよくわかる」の目標値85%は少し高いように思う。	・1年を通して「話し合い」のレベルアップを意識してきた結果、型の定着や考えを深めるといった意識の向上につながった。今後はさらに、学びが深まっているかどうかという視点で検証していく必要がある。 ・各教科でどのようなタブレットの使い方をしているのか、お互い見合ったり交流したりする機会を設ける。 ・授業と家庭学習のつながりを意識した課題設定を行う。
		2 ICTの活用 ICTを有効活用し、授業改善を図る。	タブレット端末を活用して授業を行っている教員の割合	100%以上	100%	100%	100%	A					
積極的な生徒指導の推進	自主的・主体的な活動を通して、自己肯定感を高める。	生徒会活動を活性化させ、ボランティア活動や貢献活動をしくむ。	「学校が楽しい」と感じる生徒の割合	80%以上	71%	66%	82%	B	・生徒会を中心に、「全校体操」「運動会開校」などの活動を実施した。他学年との関わりを通して、自己有用感や自己肯定感を高めるような取組を進め、「自分に良いところがある」と思う生徒の割合が増した。また、生徒の成果物や行事の様子などを提示することで、生徒同士で励みあえるよう取り組む。生徒同士で評価し合ったことも、効果があったと思ふ。 ・様々な取り組みから、「学校が楽しい」と感じる生徒の増加につながっていることから、取組を工夫し、学校生活の充実へとつなげていく必要がある。	○		・「学校が楽しい」とも「不登校」もつながっている部分がある。生徒にとってこのような力が必要で、どの様な経験の積み重ねが大事なのか考えていく必要がある。また、中学校だけでなく、子供の成長を長い目で見て、生き生きと生きていかなければならない。 ・不登校の人数が増えている。他校の様子や要因(コロナの影響など)をどうにか把握する必要がある。 ・不登校生徒については、保護者連携も強めていかなければいけない。学校の状況をいまいち把握、定期的な声掛けなど、丁寧な対応をお願いする。	
			「自分には良いところがある」と思う生徒の割合	80%以上	74%	78%	97%	B					
体力の向上と健康の増進	生徒が、安心して生活できる学校づくりを進める。 ◎不登校対策	「はっさく教室」、SC、SSW等との密接な連携を図り、課題を解決する。	暴力行為等の問題行動の件数	0件	1件	2件	0%	D	・2学期1件の暴力行為が発生し、年間で2件となった。原因は、人のかかわり方にあることから、SSUの実施など、学年を中心に継続した取組を行ってきた。今は落ち着いて生活できており、気になる行動等もあまり見られなくなっている。 ・不登校生徒に対して、担任を中心に粘り強く関わっていくとともに、SC・SSW・進路指導教員と密に連携をとりながら支援を続けることで、学校の教育は促されていく。各校連携や教員で連携する時期の増加につながっている。不登校生徒数は増加傾向にあるので、来年度に向けて対応を工夫していく必要がある。	○		・SNSとの付き合い方について、専門家にによる講演会等を実施し、理解を深めたい。 ・委員会を活用し、定期的に頭や運動に向けた取組(強化運動の取組など)を行う。 ・放課小中合同で体力づくりの取組を行う。	
			不登校生徒の人数	10人以下	5人	15人	0%	D					
働き方改革の推進	基本的な生活習慣の確立や、体力・運動能力の向上を図る。	1 基本的な生活習慣を整える。 2 保健体育や部活動を通して、体力の向上を図る。	普段(月～金)1日あたりのゲームやスマホの使用時間	2時間以下	40%	73%	73%	C	・保健委員会にて「メディアの時間を減らそうWEEK」を実施し、各クラスで取り組みを決定し、実行、点検を行った結果、目標を達成する生徒が増加した。 ただし、中間試験期間に合わせての実施だったこともあり、普段から意識できるような取組を継続していく必要がある。 ・新体力テスト全般的に課題を。SNSの普及や活動場所の制限が進む中、個人の意識をあげていくことが必要である。新たな体力テストで成果と課題を発見するの動き、健康の保持増進と運動の関連を説明し生徒が自主的に体を動かそうとする意欲を育てる工夫が必要である。	○		・スマホ、ゲームの依存度、体力の低下はコロナ禍に続いてさらに進んだのではないかと、特に増えつつある。定期的に体を動かしている生徒とそうでない生徒と、体力の二極化の懸念があるのでないか。 ・体力づくりについても、個別に必要に応じて、専門家にによる講演会等を実施し、理解を深めたい。 ・委員会を活用し、定期的に頭や運動に向けた取組(強化運動の取組など)を行う。 ・放課小中合同で体力づくりの取組を行う。	
			新体力テストで、数値の低かった2種目が向上した生徒の割合	全員、数値の低かった2種目が向上	—	41%	41%	D					
働き方改革の推進	組織として、業務改善を進める。	生徒に向き合う時間を確保するため、各分掌において現在の業務の軽減や効率化を図る。	「日々の業務の中で、充実感を得られている」教職員の割合	80%以上	93%	83.3%	104%	A	・「日々の業務の中で充実感を得られている」教職員の割合は83.3%と減少している。「児童生徒と向き合う時間が確保されている」「新たな取組を行う場合スクラップ＆ビルドを行っている」等の項目も前回から数値が上がっている。様々な取組が再開されている中、多忙さが感じていると書き残る。行事等の目的、意義、効果的な進め方を丁寧に交流しながら、前向きな取組を継続していかなくてはならない。前回は(2学期)より割合が減少している。前回と比べて、土日の大会等が少ない時期であることは要因として挙げられるが、自ら、各自で設定した時間の中、それぞれのペースで効率よく業務を進めている様子が見られる。	○		・目標のクリアだけにとられず、いかに充実した日々を送れるかを大切にしたい。 ・職員、仕事、職場に対する考え方はとても肯定的に前向きな意見があることこそ、家と学校の間にはある程度、共通の考えや目標があることこそ大事。共通で考えていることを大切にしたい。 ・P.T.A.、地域と連携しながら先立りの負担が少なくなければと願う。地域全体で生徒たちを育む仕組みが必要である。	
			教職員の勤務時間外の在校時間の割合	1カ月の時間外の平均50時間以内	62時間(4月～6月)	53時間(10月～12月)	94%	B					

【自己評価 評価】
 A: 100≦(目標達成)
 C: 60≦(もう少し) < 80
 B: 80≦(ほぼ達成) < 100
 D: (できていない) < 60

【学校関係者評価】
 イ: 自己評価は適正である。ロ: 自己評価は適正でない。
 ハ: わからない。